

「国際シンポジウム」と「国際学術講演会」前後 (報告と追記)

佐佐木茂美*

明星大学の招聘に応じて10月10日、来日されたソルボンヌ大学名誉教授、フィリップ・メナール氏* (Philippe Ménard)、その機会に東京大学名誉教授、渡辺守章氏**を迎え、創立40周年を祝う記念行事の一環としての「国際シンポジウム」が、2004年10月12日(火曜)午後開催された(於日野校舎)。

1923年に遡る母体をもつ明星学苑は、40年前の1964年に大学(一学部)を置き、独自の教育理念である「世界に信頼される日本人」を実践に移す事となる。手始めに、二年目に高名なフランスの哲学者、ガブリエル・マルセル (Gabriel Marcel) を招き、「精神の勇氣」という表題の講演がなされる(1966/6/3)。続いて、歴史家デイエス・D・コラルをその翌々年に、さらに仏文学者ジャン・メナール (Jean Mesnard)¹⁾が1971年、本学での講演を行う(11/26)。日本では極めてよく知られたこのパスカル学者より20年——その間、原則的に三年ごとに外国人の招待講演がある——ソルボンヌの同僚、フィリップ・メナール(綴りは異なる)氏が明星大学に来学、講演は反響を得た(1992/10/28)。本学所蔵の稀観本に関心のあった氏の、筆者を介し大学へアプローチがあり講演が実現した²⁾。従って今回の2004年は再度という事になる。

ただ、一講演者により展開される一主題に限定される事なく、時代やジャンルを異にする、対する講師を日本人とする、複眼的に「文化」に対峙する新機軸と言う点で従来の催しとは異なる筈である。その実現のために、まず旧知の渡辺守章氏の快諾を得ていた。

開催は台風影響下に拘らず、日野・青梅校舎の教職員、学生はもちろん学外(他大学・諸学会会員や都及び市民一般も含む)の多数の参加を得て成功裡に閉会することができた。フィリップ・メナール氏は続いてさる10月16日(土)午後にも青梅校舎での講演をした。

(本稿は二部よりなり、まず、上記「国際シンポジウム」および「国際学術講演会」の起案者であり、前者の司会、後者の通訳を務めた立場からの報告とその追記とより成る。したがって三つの講演の内容の掲載であったり分析してみせるという事はしない。刊行が予定されており、所詮決定稿は「まだ」読んではいないからである。)

「国際シンポジウム」、(10月12日、午後、於日野校舎)

渡辺守章、「ポール・クローデルと能、能とクローデル」

フィリップ・メナール、「マルコ・ポーロの『東方見聞録』に於ける

日本のイメージ」(通訳、横山安由美)

(司会、佐佐木茂美)

渡辺守章氏より明星大学での今回の講演「ポール・クローデルと能、能とクローデル」のための1.「見所のクローデル」、2.「クローデルが読み得た文献」、3.「クローデル観能記」、4.「クローデルの問題形成」、5.「特権的な出会い」など、四ページにわたる出席者向けのワープロの「資料」が寄せられた(以下の4-8頁参照)。別便で司会向けに、講演の順序別のタイトル、そのおおむね所要時間を記したものが届いた³⁾。

一方、メナール氏の講演は——原稿はあらかじめ司会に手渡されていた——通訳者、横山安由美氏⁴⁾からその「要旨」が届いた。両講演のバランスからマルコ・ポーロ関係の「配布資料」を急遽用意する必要に迫られた。時間はなかった。非専門家向きの資料は次の構成を持つ(以下1-4頁参照)。I. Marco Poloは? II. 『東方見聞録』生成、といったものから始めて、III. 「メナール教授の講演」で12年前(1992/10/28)の明星大学での講演「マルコ・ポーロと未知の国・アジアの図」⁵⁾(L'illustration du "Devisement du Monde" de Marco Polo)との関連を示した。手書き写本のうち彩色画を含む四冊を列举、いずれもその彩色画で名高いとしても、B. N. f. fr. 2810の参照が最も多いこと、さらに今回の講演の方法論を略述した。これは東洋学/ポーロ学の専門家にたいしても有効なもの判断したからにほかならない。フランス中国学を始めとする日本を含む国際的な中国学との資料突き合わせによる比較文化的な面での「接近」である事をその際指摘した。IV. としてメナール氏の刊行中の校訂本の写本(1330-1340年頃)に触れた。

メナール氏の講演をもってすぐれて「学際比較」を前にしている事に注意しなければならない。文学研究内部での図像学⁶⁾研究のモノグラフィーないしテキスト理解への重要な言及はほかに、すでにある。だが体系的な領域比較を持ってのテキストが語られる事はまずなかった。

三回⁷⁾にわたって手直しされた原稿をメナール氏より順次受け、それを通訳者横山氏に回送、また白黒の挿画部分を折から渡仏中の筆者の持参した明星大学図書館所蔵の『蒙古襲来絵詞』のカラー頁との差し替え作業を行ったりもした⁸⁾。したがって、講演が画像解説に基盤を置くものであれば、その置き換えに終日、かつ連日立ち会った筆者は、誠実な知的営為を尽くされたものが用意されたのを確認する事になった。

一方、クローデルの講演においても、研鑽の真髄、通常はその場での自在な作品としての出来であるはずを、「めずらしく書いたものを持して」臨まれたと言う渡辺氏の今回の講演が学術的に高度なものであって、この事は、教育現場への配慮が示された「資料」の会場配布とともに特記せねばならない。また、あらかじめ1978年の「外国語科研究紀要」の論

文⁹⁾(フランス語)、「クローデルと能」(Clau-del et le nô)が相方のメナール氏と司会用に送付があって両講師間の意思疎通もなされた。それによると1956年以来、実に四半世紀におよぶ思索と推敲、それを「めずらしく書いたものを持して」と、「国際シンポジウム」直後のメッセージ中の氏の言葉の重さは推して知るべしである。「国際シンポジウム」の卓越した両講演の成功の決定的な鍵であった事がここで強調されねばならないだろう。この点、司会者として、大学として、第一に深甚の謝意を渡辺氏とメナール氏に捧げる。

「国際シンポジウム」と言うからには二カ国語(日本語とフランス語)による討議が想定され、言語を異にする講師¹⁰⁾と特に聴衆の考慮が、オーガナイザーを兼ねた司会にとって重要であった事をこの場で指摘して置かなければならない。通訳の任を立派に果たした横山安由美氏はフランス語から日本語へ、——こうした形式ではそもそも重要な任務——あらかじめ任命してあった三名の「会場からの質問者」も日仏両語で、時間の制約に対応、司会は次の配分を考えるとという順回しをあらかじめ想定してあった。



駐日仏大使として我が国にあり、日本の古典演劇なかならず「能」との接点となるポール・クローデルと言う一つの個性の位置する20世紀前半と、マルコ・ポーロ(Marco Polo)(1254(?)¹¹⁾-1324)と『東方見聞録』中の日本に関する真偽ないまぜの記述——ヨーロッパに初めて日本が紹介された時点を引き合わすという、これはまさに「比較」の原点に立つという事にほかならない。二十世紀前半より発信される{比較文化論}から遡求しても十三世紀末とのスパンはなお長い。「ヨーロッパ外縁部への幻惑」と「近代ヨーロッパ批判」(古典古代を典拠にするヨーロッパ批判)を{戦略}とする「先駆的な」(渡辺氏の冒頭部の言葉)この詩人は、近代が捨て去ったヨーロッパ中世に、オリエントという見透かされた東方を超越しての始源を求めるヨーロッパ——特にフランス¹²⁾——の交流史的性質をまづ指示するという事でもあった。

クローデルの着任以降の1921年から1927年までの六年(実質4年半)は——クローデルは日本に来たかったのだ(渡辺氏による)——精力的な日本文化への接近の試み、日本文化論、『朝日の中の黒い鳥』の誕生であり、かつ在任中の1924年12月、大使クローデルはその使命の強い自覚から日本とフランスの文化交流のための選びとられた場所、日仏政府の文化拠点を東京日仏会館としその開館に導く。

そのうえ、今回の「国際シンポジウム」翌日の10月13日(水)は本学との共催で、この

日仏会館でのメナール氏の「マルコ・ポーロの旅：中世の草稿の挿画に基づいて」(Le voyage de Marco Polo d'après les illustrations des manuscrits médiévaux) 主題の講演が行なわれるべく調整した¹³⁾。

奇しくも、今年はこの文化拠点の丁度80年であり、来年にかけてこの詩人・大使の文化交流への貢献を記念する催しが日本でポール・クロードル研究の第一人者である渡辺守章氏等を中心に行なわれようとする「まさに、その時」なのである。

また、没後50年を来年に控えたというフランスの詩人/駐日大使の我が国の古典芸能のうち最も関心を示した「能」との接点を「ポール・クロードルと能、能とクロードル」¹⁴⁾ (Paul Claudel et le Nô, le Nô et Paul Claudel) という主題に含ませた講演と、近年まで欧米と日本の対比的ないし対称構造の狭間にあって知られることのなかった中央アジアから東アジアに延びた軍事的勢力の拡大と文化を論ずるマルコ・ポーロの二つの講演の導入の部が司会により簡略に示される。2004年10月に入ってからのもンゴルの覇者、クビライ・ハーンの靈廟発見¹⁵⁾の時事的価値の想起とあわせてメナール氏はこの発見にかなり懐疑的である、という控え室での談話の紹介もあった。主として教育的配慮の「資料」配布に加えて、『東方見聞録¹⁶⁾』と言う日本語タイトルについて司会は、1914年8月刊の佐野安太郎の訳が最初であり、特に戦後、マルコ・ポーロの名とともに定着を見る経緯を手短かに語る。フランス語でのメナール氏の用いているタイトルが『世界の叙述』(Devisement du Monde)であり、ほかに『アジアの驚異の書』、『大ハーンの書』等、イタリア語での『百万』などが注目に価する事が指摘され、ペルシャ、中央アジア、極東のグローバルなヴィジョンを与える最初のフランス語による書としてマルコ・ポーロを位置づけた。次いで日本についての記載場所をテキスト全体の中に位置させ、モンゴルによる日本の侵略計画とハーンの軍の敗退が第三部、158章から159章にあたる事を指摘し、メナール氏の講演の導入部とした。

『大ハーンの書』の「タイトル」——ここでは便宜上の使用である。中世フランス語で厳密には「タイトル」にあたるものはない——は『東方見聞録』に一見して遠い内容を示唆している事に注意しなければならない。メナール氏の講演の箇所である第三部には、いわば大ハーンに直々に接しその使命を遂行していく成人したマルコの活躍の時間が綴られている。だが彼の仕えたクビライ・ハーンへの崇拜はこの部にとどまらぬ『東方見聞録』全体に通定しているコンセプトである(政治的意味合いは捨象しても)。その上メナール氏の監修かつ校訂途上の手書き写本(大英図書館¹⁷⁾Royal 19D1)——2001年第一巻、2003年に第二巻¹⁸⁾、本年5月に第三巻¹⁹⁾が既刊——は「大いなるアルメニア、ペルシャ、インドのタルタル、世界の大きい驚異につきて語る偉大なるハーンの書ここに始まる」(Ci commence li livres du Grant Caam qui parole de la Grant Ermenie, de Persse et des Tartars d'Ynde et des granz merveilles qui par le monde sont.)と「書出し語」(incipit)で述べている。写本により種々異動のある書き出し部であり、「カンバリュック²⁰⁾の大きい都市の偉大なるハーンと呼ばるる書は終わる」(Explicit le livre nommé Du Grant Kaan de la grant cité de Cambaluc.)の「書末語」(explicit)との組み合わせ具合と言いRoyal 19D1(本書は58葉から135葉を占める)は特に明確な意志を持ってモンゴルの覇者に捧げられた一書として扱われている。こうなると、メナール氏によるこの写本の選定そのものと、氏の講演の主題の真意は『大ハーンの書』と「日本」、つまり『東方見聞録』中の

クビライの日本攻略（弘安の役のみに集約されている）の攻防であり、テキストの中とその他にもろもろの写本中の彩色画を対する日本側の画像的資料の付き合い合わせ、という事になる。

既に12年前に求められての助言、——出来るだけ多くの関係者に接するよう、——とした記憶があり、それが今回は徹底して実行され、多くの同僚、学生、本学の大学院生、他学の若手研究者を含める接触があり、彼らに激励の言葉を惜しまれなかったことも日野・青梅を通じ本学教員との密接な交流も成立した事を指摘しておかなければならない²¹⁾。

シンポジウム「東西文化交流」(Echange Culturel Europe/Japon)の両講演終了後の質疑応答「内から見た日本、外から見た日本」(Le Japon vu de dedans et le Japon vu de dehors)の部で、三名の「会場からの質問者」²²⁾の出番があった。マルコ・ポーロの時代、彼のテキストは「どのように読まれ、受容されたか？」(片山幹生)。王侯貴族・知識階級に受け入れられた仏語ヴァージョン、商人層読者が目立つ伊・西ヴァージョンなど、すでに写本段階で広範な受容対象となったとのメナール氏の解答が与えられた。また、ポーロの第三部の日本人の「食人の慣習」について、「なぜ？」の問いが発せられた²³⁾(三井高志)。1923年3月に上映されたクローデルの創作劇『女と影』の果たした役割について「もはや単なる傍観者ではなく、何らかの「日本的」なものの創出を「現場で」試みた表現者であった」事が劇詩人の以降にどのような意味を持ち得たか？(間瀬幸江)

演出家でもある渡辺守章氏自身の『内濠十二景あるいは二重の影』(*La Muraille intérieure de Tokyo ou l'ombre double*)が、2001年9月の第2週、クローデルの隠棲の城で、かつクローデルの墓所近くで演ぜられた事は記憶に新しい。「空間庭園」の主催者は和風庭園に囲まれたフランスの地において能空間を「クローデル、日本を聴く」(Claudel écoute le Japon)というブランク国際クローデル会議のなかに設えてみせた。今回、『女と影』について「能のごとき」(une sorte de NO)とし、断ずることは避けられたことが注目される。

本学の催しに先立って、2004年10月3日(日)に開催された「日本フランス語・フランス文学会」秋季総会(於北海道大)におけるシンポジウム「文化装置としての書物：文学研究の内と外」²⁴⁾で稿者は唯一の質疑応答を許された。「知」の拡大を十六世紀後半から啓蒙思想まで、書物という「文化装置」の百科全書的影響が結論されたので、この機会に「大航海時代」、地理上の拡大と15世紀後半におけるマルコ・ポーロの『東方見聞録』の地理書としての側面がまさに初期刊行本に有機的に関わる事を示唆した。クリストフ・コロンブスのラテン語版(1485年)への念入りな書き込みノートは知られており、この読書がかれをして大西洋への船出を決意させた事は知られる、とし1483年ないし1484年とされる本学所蔵本の歴史的意味を指摘²⁵⁾、併せて「国際シンポジウム」の一週間後の本学に於けるメナール氏の講演をこの総会の席で紹介する事が出来た。

メナール氏は帰国後の連絡(11/28)で、Royal19D1写本のポーロのテキストの所収に続くオドリック・ド・ポルドノヌ(Odoric de Pordonone)の『海の彼方の驚異』(*Merveilles d'Outremer*)、ジャン・ド・ヴィネ(Jean de Vignay)フランス語訳、136葉から143葉が講演主題となるヴェネツィアの学会に向う、とあった。マルコ生誕750年を祝い、氏

はなお旅を止めずポーロを語り、さらに先行する旅人を語り続ける。

注

* 前年度までソルボンヌ大学院委員長。 ** 先年まで放送大学副学長。

メナール氏に関しては紹介が必要であろう。ここでは主として我が国との関わりを中心に紹介する。1935年1月1日フランス西南部ジロンド県に生る。中世フランス文学の第一人者、故ジャン・フラピエ (Jean Frappier) (1899-1974)、中世フランス文学の最も重要な学会の一「国際アーサー王学会」(Société Internationale Arthurienne) の創設の主要メンバー、同学会会長、名誉会長、ソルボンヌ大学名誉教授の数ある弟子の筆頭にある。同学会は我が国でも早くから知られ、フラピエがフランス政府・文化使節として来日した1967年、次いで『同教授記念論文集』(*Mélanges de Langue et de Littérature du Moyen Age et de la Renaissance*, Paris, 2 vols, 1970) には souscripteurs (委員会による依頼) として佐藤輝夫 (明星大学教授)、新村猛 (名古屋大)、有永隼人 (東北大)、松原秀一 (慶応大)、長谷川太郎 (愛知県立大)、佐佐木茂美の日本人6名の名が記載されている。フラピエの推挙により1974年から、同学会の『年鑑』(*Bulletin Bibliographique de la Société Internationale Arthurienne*) (A5版、500頁前後) のために日本関係の書誌を稿者が担当、1981年の日本支部の国際学会総会 (於グラスゴー) での承認とともに1994年まで幹事を務めていた。当時、支部会長は佐藤輝夫氏、支部および事務局の所在地は明星大学 (日野校舎) 内にあり、1988年に本学で「支部」総会を開催した。

当時、学位論文を用意していた稿者はメナール氏とはフラピエ門下であり、アーサー王学会の上記事項に先駆け、フラピエ教授自宅にメナール氏とともに招かれ三十数年になる。

メナール氏主要著書：『中世フランスの宮廷文学における哄笑と微笑』(*Le Rire et le sourire dans le Roman courtois en France au Moyen Age, (1150-1250)*, Paris, 1969)；『中世のフランスのフェアリオ』(*Fabliaux français du Moyen Age*), Genève, 1979；『マリ・ド・フランスの短詩、中世の愛と冒険の物語』(*Les Lais de Marie de France, contes d'amour et d'aventures du Moyen Age*), Paris, 1979；『古フランス語統辞法』(*Syntaxe de l'Ancien Français, Bordeaux*, 1974以降4版を数える)；『散文トリストラン物語』(*Le Roman de Tristan en prose*), Genève, tome I, 1987 (全9巻の監修を手がける)；『マルコ・ポーロの東方見聞録』(*Le Devisement du Monde de Marco Polo*), Genève, 2001, tome I (以降6巻の完結まで監修の任にある)。

1998年『フィリップ・メナール教授記念論文集』(*Miscellanea Mediaevalia, Mélanges offerts à Philippe Ménard*, Paris, 2 vols) には souscripteurs として天沢退二郎 (明治学院大)、原野昇 (広島大)、細川哲士 (立教大)、池上忠弘 (成城大)、神沢栄三 (名古屋大)、近藤寿良 (金沢大)、松原秀一 (慶応大)、高宮利行 (慶応大)、佐佐木茂美の9名の名の記載と日本人の二論文の収録がある (T. Amazawa, "La Devineuse du nom de Perceval", tome I, pp. 33-36; S. Sasaki, "Anel et Seel: De Bérout et du Lancelot au Roman de Tristan en prose," tome II, pp. 1203-1212)。

- 1) ガブリエル・マルセルおよびジャン・メナールの本学への招聘は主として故佐藤輝夫 (本学名誉教授・早稲田大学名誉教授) によるものと思われる。1994/4にジャン・メナール氏に故人となられた佐藤先生の追悼の拙文 (複数) を送付 (1996)、氏より弔文が筆者あてに届いた。
- 2) 当時の学長児玉三夫氏宛に書簡が出され、その写しが筆者に手渡された。筆者はソルボンヌ留学中の指導教授ジャン・フラピエ (Jean Frappier) が主たる結成メンバーである「国際アーサー王学会」(Société Internationale Arthurienne) の当時幹事を務め、日本支部所在地は明星大学にあった (会長、佐藤輝夫)。1988年の本学での支部総会時同門のフィリップ・メナール氏は当時フランス支部の会長であった。
- 3) 1) クローデル日本滞在の時期 (国際関係も含めて) (5分)、3) クローデルは何に関心を示したか (5分)、伝統演劇、伝統的な造形美術 (絵画・彫刻・建築) 等、3) クローデルの言説における変化 (5分)、——「エッセイスト」の誕生・比較文化論、日仏文化交流の先駆け、4) こうしたなかでの「能」の特権的な位置 (10分)、5) 結論：何かが変わったか？『縞子の靴』以降 (5分)。
- 4) フェリス女学院大学、国際交流学部、助教授 (中世フランス文学)。原稿入手の経緯等は下掲註7) 参照。
- 5) 『明星大学研究紀要』、第2号 (1994)、152-178頁。収録 (そのうち解説部は筆者による (pp. 152-156))。当時としては高い技術のカラー頁 (pp. 157-164) を含む (刊行後2~3年で絶版)。なお、メナール氏の本学での講演の草稿前段階は一枚を除く黑白版でソルボンヌとフランス上院主催のコルロック (2/3/1985) で発表され、翌年出版されている。
- 6) また、ロジェ・シェアマン・ルーミス、ベルギー・リエージュ学派 (リタ・ルジュース、ジャック・ステイエノン)、さらにアントワーペン学派 (ヘルマン・ブラート、コレット・ヴァン・クルプット) など Roger Sherman Loomis, *Illustrations of Medieval Romance on Tiles from Chertsey Abbey*; New York, Johnson Reprint Corp., 1967; du même, *Arthurian Legends in Medieval Art*, Reprint, New York, Kraus, 1975; Jac-

- ques Stiennon, and Rita Lejeune, "La légende arthurienne dans la sculpture de la cathédrale de Modène," in *Cahiers de Civilisation Médiévale*, tome 6 (1963), pp. 281-296 など。美学からの文学への接近はここでは除外している。フランス中世文学を志す大学院生（修士課程）はある時期ジョゼフ・ベディエ（Joseph Bédier）のエコール・ノルマルの同期生（1883年）であったエミール・マール（Emile Mâle）の三巻本やルイ・レオ（Louis Réau）の6巻本を読み、中世文学とキリスト教文化一般のバックグラウンドを納得してきたのではないか？
- 7) 二回（8月27日及び9月3日）は今夏、メナール氏宅で稿者に手渡され、帰国してからの自宅ファックスへの第三校であった。当初、講演依頼の時点では『中国と日本』、『日本と中国』、続いて「中国」が除かれ、9月の段階での題は「マルコ・ポーロの『東方見聞録』に置ける日本のイメージ」（*Les Images du Japon dans le Devisement du Monde* de Marco Polo）（ポスターの印刷はこの段階）であった。
 - 8) また「国際シンポジウム」の二日前柴田雅生氏と服部裕氏とのスキャナーによる取り込みの共同作業が行われ講演の映写の画像説明がスムーズに行なわれた事を記しておきたい。
 - 9) 第25巻、第2号、東京大学教養学部外国語科、pp. 1-22et 写真頁2（本稿は1976/7/28の「国際フランス文学研究会」の発表を収録したものである）。
 - 10) 渡辺守章氏に講演をお願いするにあたりその点が考慮された事は言うまでもない。氏は今回直前にもフランス国営放送で長時間、インタヴューに応じている。
 - 11) メナール氏はポーロの生年を確定してはいない。
 - 12) 『シェクスピア戯曲集』の1623年ファースト・フォリオ版を所有する明星大学（『兄玉記念図書館開館25周年記念、明星大学所蔵貴重書図録』、2001/12/20、p. 60）で、しかもグローブ座を模したシェクスピア・ホールでマルコ・ポーロとクロードルの講演が行われる事は、——「まぎれもなく」ヨーロッパの中心はフランスであるから、——「今日、バランスがここにとられる」（「国際シンポジウム」に先立っての斉藤和明氏の挨拶）。
 - 13) 学長（日仏会館ではその長を通常「学長」と呼ぶ）フランソワーズ・サバン（Françoise Sabban）氏より講演の聴衆への紹介の任が筆者に委ねられた。メナール夫妻、館長、筆者と深夜までマルコ・ポーロとクロードルを主題とした会話が弾んだ。中国学者である館長のポーロへの関心は高く、またこの折の講演の聴衆の一人、フランス人女子学生がその翌日、10月14日（木）朝から集鴨の「東洋文庫」でのメナール氏の通訳を務めた。氏のこの中国学の文献渉獵に終日、本学の古田島洋介氏が同道、同席した。
 - 14) 講演タイトルのフランス語訳は後半も *Paul Claudel* と繰り返されている事に注意（両語間の語感の差異による）。あくまで司会の責任でなされた。
 - 15) 『読売新聞』、2004年10月5日（火）朝刊、p. 1、p. 38。『毎日新聞』、2004年10月5日（火）朝刊、p. 1；p. 27；『朝日新聞』、2004年10月5日（火）朝刊、p. 1
 - 16) 邦語初訳は瓜生寅による（1912年）『まるこぼろ紀行』であった。ただし、既に1906年（明治38年）刊の『東洋歴史辞典』（掘田璋左石、青木武助、深沢鏗吉著）にはポーロの著作として「トーボーケンブノク東方見聞録 *Mirabilia Mund*」とある。（拙稿、『人間は樹木のごとく……』(V) 一旅と樹木の伝説）、『明星大学研究紀要』、第8号（平成12年）、日本文化学部・言語文化学科、p. 141、note 3)。
陸路3年半、海路（海路）4年半、計8年として、元朝に仕えた17年が考慮される時、『紀行』というより、それはやはり異国「滞在記」であろう。
 - 17) 最古の写本の一つでおそらくフランスで制作されたものとみられる（Ed. par Ph. Ménard, tome 1, p. 44）。
 - 18) 第二巻ビブリオには筆者の論稿が収録されている：S. Sasaki, "Faune et Flore dans le *Devisement du Monde* : Mont Vert du Grand Khane et Vergier de Deduit," in *Mélanges J. Cl. Faucon*, Paris, 2000, pp. 380-388.
 - 19) 今夏、メナール氏より、第一巻に続き第三巻の寄贈を受ける。本巻は「皇帝クビライ・ハーン」（*L'empereur Khoubilai Khan*）の副題を与えている。本巻の校訂者はジャン・クロード・フォーコン氏（Jean-Claude Faucon）以下二名。明星大学は氏（メナール氏の高弟、ツールーズ大学大学院教授）を青梅校舎に講師として迎えている（2001/5/10）。演題「ヨーロッパ中世の騎士像」（通訳：筆者）。
 - 20) トルコ語で「ハーンの都」の意。モンゴルの王者が冬の間の宮殿をもつ北京を指す。その宮殿・庭園については、18)の拙論稿の他、『明星大学紀要』（上掲註16をも参照）。
 - 21) また本学の三橋正氏の手管があって、『蝦蟇』編集部とのインタビュー等が実現した。
 - 22) 間瀬幸江（早稲田大学、演劇博物館助手）、片山幹生（早稲田大学、第一文学部助手）、三井高志（明星大学大学院、人文学研究科、比較文学専攻）
 - 23) 学問上の「タブー」、マルコ・ポーロ研究上の未解決事項。稿者のヨーロッパ人による「最初の日本人像」参照（明星大学ホーム・ページ「ことばと文化のミニ講座」。<http://www.ome.meisei-u.ac.jp/nihonbun/column/04/001.html>）。

- 24) 司会、月村辰雄（東京大）、パネリスト、鷺見洋一（慶応大）、長谷川輝夫（上智大）、宮下志朗（東京大）。
 25) 拙稿、『『人間は樹木のごとく……』(II) 二人の旅人』『明星大学研究紀要』、第7号、——および註12) - 13) および「中世文学における旅（航行と紀行）の神話的要素の抽出と動性の心性史的意味を問う研究」平成8年度～平成10年度科学研究費補助金、研究成果報告書、平成11年3月、pp.19-30参照。

イタリア・ポローニャのドミニコ会士、フランチェスコ・ピビーノ（Francesco Pipino）によりおよそ1320年ごろヴェネツィア語の版からのラテン訳を見る。写本数およそ50、最も広範囲な成功を収める。この版のラテン語初版が明星大学所蔵（1483年ないし1484年の刊行）のもの（この件に関しては；同『紀要』、第2号、5）p.178）をも参照。今回、ピビーノ本である事は疑いの余地はない、とメナール氏の本学の「稀観本」室での言（10/12）。

すでにメナール氏は1992年来日の折、この初期刊行本を閲覧。それより三年後、1995年2月5日付きの氏よりの書簡で依頼を受け、筆者は翌年にかけて明星大学所蔵本と東洋文庫本（1485年刊行）をページを追って詳細な比較をし、纏められた結果を氏に送っている。

〔国際学術講演会〕 フィリップ・メナール氏 『『散文トリスタン物語』における独創性』

（10月16日（土曜）、午後、於青梅校舎）

『東方見聞録』以上に、40周年を寿ぐこの行事の一環「国際学術講演会」である『散文トリスタン』に関してはまず配布資料が必要であると判断された（資料ページ参照）。「散文」と銘打たれた、専門家にとっても漸く1997年になってテキスト全体を読む事が出来る、——「資料」V.「メナール教授の指導による校訂本の刊行」参照——それ以前はレジュメのみが存在した訳で、一般（学生、非専門家）に知られる事はなかった。講演は長大なこのテキストを縦横に引用し、読んだ事のないとまず想定される会場とのギャップは甚だしいものがあった。

10/12の二つの講演（クローデルとマルコ・ポーロ）はシンポジウムという形式の持つ一回性の中から救出せねばならないもの、すなわち「日欧文化交流」を記し留めておくという急務があった。ところが、単発の講演はそれだけで「閉じる」のであって、テキストとしての講演が刊行される事を前提にしていればそれを「今から」分析してみせるのはなお適当ではない。

マルコ・ポーロと同様に²⁶⁾、起案者にして通訳たる稿者に早々に今夏、講演の「要約版」²⁷⁾が手渡された。だがマルコ・ポーロの場合のように絶えざる推敲の対象でありつつも、原稿全体ではなかったし、次々に新たなバージョンを渡されることはなかった。

講演の壇上で、雄弁になったメナール氏は、常時2分から3分の長丁場をしいた。通訳者は『散文トリスタン』を読み親しんで²⁸⁾いなければその任を全うし得なかったろうし、自分の理解した場面をその場で我々の言語に再現に努めるという事になった。

ただし、こうした入れ替え故によりわかりやすくなった筈であり、めったに中世学者でも読まぬほかのテキストの引用が突如入ったりをクリアできた安堵感があった。

『『散文トリスタン物語』における「独創性」、講演タイトルのみが当初与えられて、ポスター等の印刷に追い込まれたわけであるから、「独創性」innovation、lat. novus（新しい）から理解される「刷新」、「革新」、「改革」、「新機軸」という含みの多い語の訳出には多少の戸惑いがあったの（独創性）となった。勿論、タイトルのみを持ってしても、まず「韻文」